

パンデミック下のメキシコで

—子ども・移民・女性—

講師：工藤律子 (1991年院卒、ジャーナリスト)

2月末にこのテーマでオンライン講演をさせていただいた時、メキシコの新型コロナによる死者数は世界で4番目に多く、18万人以上だった。4月18日現在で20万人を超えたが、感染者数の増加ペースは落ちているのが、救いだ。

そんな状況下でも、この国は出入国が自由で、簡単な健康質問票に答えるだけで訪問できる。おかげで私とパートナーでフォトジャーナリストの篠田有史は、昨年12月に取材をすることができた。この時、米国はまだトランプ政権で、その事実がメキシコにおける移民の状況に大きく影響していた。ここでは講演時と異なり、その「移民」の話から始めよう。

というのも、ここ数日、未成年者が単独で中米から米国を目指し、米墨国境に押し寄せていると報じられているからだ。4月18日現在、すでに約30,000人が国境で拘束され、施設に収容されている。施設はパンク状態だ。バンデン政権は子ども移民を受け入れているという話が広がり、大勢の子どもが旅を決意した。

私たちが初めて子ども移民の取材をした2014年にも、似たような現象が起きていた。中米における若者ギャング団「マラス」による暴力の激化に伴い、オバマ政権の人道主義に期待する子どもたちが、13年秋からの1年間に5万人以上、米国境を越えた。パンデミック下の今、中米の貧困層の生活はその当時よりも悪化しているため、さら

に多くの子どもが来ると予想される。

2020年、中米諸国はパンデミックによる経済活動の停止、大型ハリケーン、マラスの暴力に襲われ、もともと厳しい生活を強いられていた人々はさらに追い詰められた。彼らにとっては新型コロナウイルス以上に、飢餓や殺害される恐怖のほうが深刻だ。そのため、パンデミックの間も移民の流れは絶えなかった。

「北」の米墨国境の町、シウダー・フアレスでは、国際移住機関 (IOM) が「フィルター・ホテル」を設置し、町にたどり着いた移民に2週間の隔離生活を要請して、新型コロナへの感染の有無を確認、発症者には治療をしている。陰性が確認された移民は、町に17ある支援施設に移り、米国に難民申請している者はその審査を待つ。トランプ政権下では、審査までは米国内の収容施設ではなく、メキシコ側で待つことが義務付けられていたからだ。メキシコ政府は、そうした移民のために、シウダー・フアレスを含む国境の町3ヶ所に、巨大な「移民統合支援センター」をつくった。そこには私たちが訪ねた際、173人が生活し、希望者はメキシコ政府の支援で職を得て、工場などで働いていた。

この町の移民で特に印象に残ったのは、旧市街で働き暮らすキューバ人の姿だ。詳しくは、岩波『世界』4月号掲載の連載「移民たちのパンデミック1」をお読みいただければと思う。

「南」のグアテマラとの国境地帯の移民ル

ートのひとつ、チアパス高地へ抜ける「中央回廊 (Corredor Central)」では、移民女性の苦難に遭遇した。中央回廊を移動する移民が通る国境の町は、米墨国境と違い、常に地域のメキシコ人、グアテマラ人が往来しており、コロナ禍でも変わらない。わりと簡単に入国できるわけだ。しかし、そこには多くの罠が待っている。特に女性にとっては、この地域を仕切る犯罪組織による人身売買や誘拐など、危険だらけだ。

「麻薬の密売を手伝わないと、お腹の子の臓器を奪うと脅されました」と話したのは、現在、チアパス州の州都トゥクストラ・グティエレスで移民女性を支援する団体「移民女性よ、あなたに助けを」を運営するエルサルバドル人のジャネット(40)だ。彼女は16年前、妊婦の時に移民したシングルマザーで、今はメキシコ人と結婚し、後に続く移民女性たちの権利を守る活動に専念している。その支援を受けるホンジュラス人女性は、マラスに夫を殺害され、自分も命からがら逃げてきた。別の施設で話をきいた母娘も、やはりホンジュラスでマラスに家族を奪われた。

1990年代、先住民武装組織「サパティスタ民族解放軍 (EZLN)」の取材でよく訪れたラス・マルガリータスの町では、「移民女性の苦しみは、多くの先住民女性のそれと同じ」と語る先住民トホラバルの女性、フアナ(46)と出会った。彼女は19歳で地域の女性たちを支援する団体を立ち上げ、2015年からは移民女性への支援も行っている。問題に立ち向かうためには、女性たちの連帯が不可欠だと考えるからだ。

これら移民女性の話は、岩波『世界』5月号掲載の「移民たちのパンデミック2」に詳しい。

移民女性が抱える問題は、近年、メキシコで注目されているフェミサイド(男性が、性別を理由に女性・少女を標的に行なう殺人)の問題と通ずるものがある。2018年、メキシコはフェミサイドの発生率が、世界221ヶ国中、ワースト23位だった。移民女性たちの主な出身国であるエルサルバドルは1位、ホンジュラスは2位だ。メキシコでは、こここのところ毎年900人を超える犠牲者が出ている。しかもそれは、あくまでも「フェミサイドと認められた数」で、殺され



シウダー・フアレスにある「移民統合支援センター」で、国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン」のボランティアの指導で工作を楽しむ移民の子どもたち。(撮影：篠田有史)

た女性は年3000人以上だともいわれる。加えてパンデミック下では、家庭内暴力が増加している。それは中米からの女性の移民が絶えない原因のひとつでもある。

講演では、もうひとつ、メキシコの貧困家庭の子どもたちの状況について、コロナ禍で実施されているテレビ授業の取材を通してお話した。メキシコ政府は、教育格差を拡げる「オンライン授業」に頼らない形での公教育の模索として、就学年齢人口3000万人の9割以上をカバーできる(はずの)テレビを活用した授業を、幼稚園から高校までの全学年で実施している。民放4局を巻き込んでの事業「家で学ぼう (Aprende en Casa)」は、ロペス・オブラドール政権の肝煎だ。

ただ、そこにもやはり様々な問題がある。貧困家庭では、いまだにアナログテレビしか持っておらず放送が見られない、親が無学で家で学ぶ子どもをサポートしきれない、先生とのやりとりにはどうしてもインターネットが必要だが手にいれるお金がない、など。十分な学習環境のない子どもたちの中には、「わからないテレビ授業をみるよりも、働いて家計を助けるほうがいい」と、勉強をやめてしまう子もいる。続けたくても、続けられる条件がなく、うつ状態になる子も。そんな子どもたちを支えるために、教師らは、知恵を絞って奮闘している。

ある小学校の教頭は、思いを込めてこう言った。

「早く直接やりとりできるようになることを願っています。私たち教師も子どもたちも、互いに触れ合い、関わりあうことでこそ、成長するのですから」

メキシコのテレビ授業については、ウェブ・イミダスでの連載「パンデミック下の教育格差を抑える メキシコの挑戦」

(https://imidas.jp/latingang/3/?article_id=170-029-21-02-g471) をご一読いただければと思う。

パンデミック下で、移民、女性、子どもの命は今、数々の危険にさらされている。それらはすべて、中米やメキシコの政府と社会が放置してきた格差や差別、暴力に起因する。そしてその背景には、米国をはじめとする先進諸国が強力に推し進めてきた新自由主義的資本主義のグローバル化がある。私たち日本人も、その流れに乗ることで、途上国における貧困を放置し格差の拡大を許してきた張本人だ。その行動は日本国内でも、これまでにない格差を生み出している。

この危機的状況を解消するには、私たち自身が既存の資本主義に大きく依存した経済・社会・生活を問い直さなければならない。人々の分断を拡げ、地球環境を破壊し、貧困地域の人々だけでなく、私たち自身の生存をも脅かすことになる持続不可能な経済システムと生活様式に、ノーを突きつけなければならない。このパンデミックにそう気づかされた人も多に違いない。あとは行動あるのみだ。



チアパス州トゥクストラ・グティエレスで「移民女性よ、あなたに助けを」を運営するエルサルバドル人のジャネット。(撮影：篠田有史)